芸能

憧れの五月と新曲

渥美二郎来社「話すように歌って」

作詞・作曲も手掛けている渥美二郎＝大分合同新聞社

五月みどりとのデュエット曲「東京ナイト」を売り出し中の演歌歌手渥美二郎が大分市の大分合同新聞社を訪問した。

東京ナイトは2012年10月にリリース。「大人なデュエット曲のスタンダードを目指して、じっくり時間をかけて頑張っています」という。曲調は懐かしい雰囲気で、覚えやすいメロディーラインだ。

少年時代から熱烈な五月のファンだった渥美がレコード会社の垣根を越えて五月にアプローチして実現した意欲作。作詞・作曲も千寿二郎（渥美のペンネーム）が手掛けている。

「小学3年生の時に地元（東京都足立区）で五月さんのコンサートがあり、すごくきれいな人だとの印象がありました。その印象は今でも変わっていない」とべたぼれのよう。

現在も二手に分かれて全国をくまなくプロモーション活動中。「皆さん、五月さんは『おひまなら来てね』といったお座敷ソングの印象が強いと思いますが、一緒にステージやレコーディングをすると、美しく高いパートがすごく出る。ぜひ、聞いてみて」と笑顔。

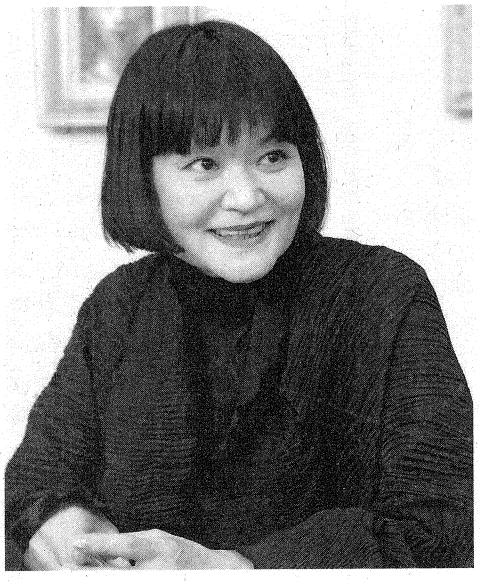
「デュエットはお酒を飲んで楽しく男女で歌えるのが魅力。せりふのようにしゃべる感じで歌うとうまくいきますよ」とこつを伝授してくれた。

渥美は流しの出身。デビュー35周年記念アルバム「演歌師」を発売中。3月には全5巻がそろう予定だ。「当時の流しの雰囲気そのままのギター1本で収録しています。流しの演歌師を体感できるようになってますよ」とちゃっかりPR。

母を思い熱唱

「魂表現したい」

佐伯市出身の歌手・みうらまちこ来社



ライブ活動と並行し、後進の指導にも力を注ぐみうらまちこ＝大分合同新聞社

佐伯市出身の歌手みうらまちこが大分市の大分合同新聞社を訪問した。

みうら（本名・三浦真知子）は佐伯鶴城高校、フェリス女学院大学を卒業し、香港や東京で会社員として勤務。音楽好きが高じて、カンツォーネを荒井基裕に、ジャズを沢田靖に、シャンソンを古賀力に師事し、1990年に日本初のシャンソン喫茶店「銀巴里」（東京・銀座）でライブデビューした。

ライブ活動と並行し、後進の指導にも力を入れている。今回は1月25日に大分市のブリック・ブロックであったライブに合わせて帰郷した。

「同窓生らが駆け付けてくれて温かいふるさとでのステージになりました」と笑顔。

最近ではジャズやシャンソン、カンツォーネだけでなく、沖縄をテーマにした曲も歌っている。「抑圧されてきた人たちを表現する歌、ジャズの音楽的基盤となったブルースもそうですが、そういう歌を歌う時は佐伯にいる母を投影しながら歌っています。苦労はあったと思いますが、何も言わずに私をかわいがって育ててくれた」と言う。

年に2回ほど大分でライブを開いており、今後も継続したいという。「音楽のジャンルはいろいろあるけれど、何かを託し、表現する手段として歌がある。今後もたくさんの人に聞いてもらえるように、自分の源流の魂を表現できるようになれば」と話している。